

令和7年度第1回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会	
日 時	令和7年11月27日（木） 10時00分～12時15分
開催場所	市庁舎18階 みなと1・2・3会議室
出席者	穴澤委員、内田委員、大野委員、岐部委員、久保田委員、小林委員、坂本委員、篠崎委員、武隈委員、鶴見委員、豊田委員、名倉委員、西尾委員、福田委員、星委員、水野委員、森委員、山野上委員、井汲委員（19名）
欠席者	有本委員、福本委員（2名）
オブザーバー	市民局地域活動推進課、健康福祉局企画課、地域支援課、横浜市社会福祉協議会
事務局	健康福祉局福祉保健課、健康福祉局生活支援課
開催形態	公開（傍聴者なし）
議 題	<p>報告事項</p> <p>（1）第5期横浜市地域福祉保健計画区地区別計画策定状況</p> <p>（2）第5期横浜市地域福祉保健計画中間評価について</p> <p>（3）啓発について</p> <p>ア 第5期地域福祉保健計画「わかりやすい版」</p> <p>イ ソーシャルキャピタルリーフレット</p> <p>ウ ちふくちゃんの活用</p> <p>意見交換</p>
議 事	<p>開会</p> <p>（近藤課長）議事に先立ち、事務局から横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会運営要綱第7条第3項の規定に基づき、定足数を満たすため会議が成立することについて報告された。</p> <p>（佐藤局長）開会挨拶</p> <p>委員紹介（大野委員、福田委員）</p> <p>報告事項</p> <p>（1）第5期横浜市地域福祉保健計画区地区別計画策定状況</p> <p>（2）第5期横浜市地域福祉保健計画中間評価について</p> <p>（鳥海係長）資料3について説明</p> <p>（西尾委員長）市計画としては今年度2年目を迎え、各区計画および地区別計画は現在策定中であり来年度からスタートする。市計画は、次年度ちょうど中間年に当たるということで、その中間評価、振り返りの実施方法についてただいまご説明いただいた。</p> <p>（久保田委員）中間評価を行うに当たり、アウトカムの評価に意見聴取をして定性評価を行うのは分かるが、現状の評価値が、どこかに示されているか教えてほしい。</p> <p>（鳥海係長）第5期計画については、経年での評価を行っているものではない。来年度、数値やヒアリングをもとにまとめ、第5期の中間評価1度目の取りまとめとしてまとめていく。</p> <p>（久保田委員）ということは、スタート時点の数値はわからないということになるか。</p>

(鳥海係長) 現状の数値は把握している。

(久保田委員) 定量ではなくて定性評価のほうは、載っていないということか。

(鳥海係長) 定性で今こうなっていますというものを、評価としてまとめているものではない。

(西尾委員長) 第5期計画で新たにロジックモデルを作成し、その評価をしていくという新しいやり方に取り組んでおり、定性評価のところは中間評価の際に意見交換をしながら評価をしていこうという形になっているのかなと思う。
次に(3)になります。

(3) 啓発について

ア 第5期横浜市地域福祉保健計画「わかりやすい版」

イ ソーシャルキャピタルリーフレット

ウ ちふくちゃんの活用

(鳥海係長) 資料3について説明

(内田委員) ちふくちゃんはすごくかわいいなと思った。
しかし、デザインの趣旨がわからないところがあり、頭の部分には何か意味があるのか教えてほしい。

(鳥海係長) ちふくちゃんは頭巾をかぶっており、地域福祉に取り組む仲間が増えると、この頭巾をみんなにかぶせていくというところを表しています。

(内田委員) その意味を加えて伝えたほうがいいのかと思う。できれば分かりやすく何か説明が加えられたほうがありがたい。

(名倉委員) 先ほど区によっては区民意見募集をしたという説明があったかと思うが、私も老人クラブの会員と話をすると、市の計画よりも自分たちの住んでいる区の計画に関心のある方が大変多い。区民意見募集というのは区の判断でされていると理解しているが、それでよいのか。またどれぐらいの区がこの区民意見募集を具体的にされたのかというのがもし分かれば、教えてほしい。

(鳥海係長) 区民意見募集は全区で行っている。区民意見募集を行う際にもわかりやすい版を作成して行ったというのは港南区の事例になる。

(穴澤委員) ソーシャルキャピタルリーフレットの活用方法はこういったところか。

(鳥海係長) 今までソーシャルキャピタルのリーフレットは、これから活動されていくという活動者の方向けの冊子と、地域の中で既に担い手として活躍している方々に見ていただくものの2つに分けて作成していた。新たに作成したものは実際に参加される方、担い手の方、双方に向けたリーフレットとなっている。

(穴澤委員) これは、各区役所とかケアプラザに置いてあるものを来館した人たちが見て、こういうことをやれるんだとか、やればいいんだなというところを見るということになるか。

(鳥海係長) 配架して見ていただくということと、区の福祉保健課では、例えば地域のイベントがある際や、地域の会合などで、ぜひ積極的に配って活用してほしいということで配布している。

(西尾委員長) わかりやすい版は、障害者プランなどではかなり作成されているが、地域福祉保健計画で全国的には、横浜市、相模原市、東京都の国立市などあまり例がなく、

非常に先駆的な、大事な取組ではないかと思っている。もっと活用されれば、さらにいろいろ参加の輪が広がっていいのではないかと思っている。

意見交換

(鳥海係長) 資料4について説明

(豊田委員) 担い手不足については、本市だけではなく、他市でもこういう話題が必ず出てくる。地域活動をどういうふうに規定していくかということも一つあるのではないかと思う。今、地域福祉の計画の分野が、必ずしも福祉や保健だけではない部分にかなり広がりを見せている。この計画が非常に広い意味合いで皆さんに働きかけをして、また、その働きかけに応じて皆さんに参加していただくことが望まれている、次の一手を講じていくときに、そういった働きかけとか、この計画についてどれだけ皆さんが知っているかということが、非常に大きなポイントになってくるのではないかと思う。

先ほどソーシャルキャピタルという話があった。こういう冊子を作って皆さんに働きかけている。一番身近なところで、自分たちのこういう活動にどう関係してくるか、どことつながりを持つかということを経えず発信しながらやることが必要だと思う。そういった分野の広がりについて、皆さんからもご意見頂きたい。これは区でやっても、何でもありという言い方は表現が悪いが、この計画に関連して見ていくと、いろいろなことが出てくるのではないかと思う。そういう意味では、やはりいろいろな分野に働きかけをしながら、そことどのようにつながっていくかというところが、今後、考えていくときの一つの部分かなと思う。

それからもう一つは、先ほど南区と鶴見区の調査の結果が出ていた。が、聞いて答えてくださる方は圧倒的に高齢世代のほうが多い。そうすると、もっと若い方をとか、あるいは今活動していてそこに入っていない方たちにもっと具体的、積極的に言うことが必要ではないかと思う。神奈川区は今、第5期計画策定最終段階に来ているが、昨年からは学校やお母さんたちに向けていろいろな取組をしている。すくすくかめっ子事業では、例えば地福計画がお母さんたちや子どもに対してどういう影響を及ぼしていくか。小学校の高学年や中学生ぐらいになると、意見を積極的に言ってくれる子たちがたくさんいる。だから、ある程度自分たちの身近なところでそういうものが感じられるような場をつくっていくとか、そういう情報を積極的に言うことが必要なのかなと。そういう意味では、本当に人口減少が進んでいて、いろいろな世代の参加が求められている。実際問題、こういう活動に参加したり、関心を持たれる方は、ある程度余裕があってそういうところに目を向けられる人ということになるが、例えば忙しくても、あるいは自分がやっていることがあったとしても、こういう計画の中で知恵や視点をどう生かせるかというところを我々が拾っていくことが重要だと思う。参加の場面をなるべく広く取っていくことが、結果的にはこういうことを周知してもらうことにつながってくると思う。その結果として広がりがどんどんできてくる。また、積み重ねもできてくると思うので、そういうものを特にやはり区レベルで広げていくことが私は重要なのかなと思ってる。

皆さんいろいろな分野でご活躍されていると思うし、区あるいは地区での活動が多いと思うので、ぜひその具体例を挙げていただけるとありがたい。

(西尾委員長) 具体的な地域活動の場面をイメージして、今のご提案のところで積極的に意見交換ができればと思う。まず、岐部委員に、連合町内会のお立場から実践されていることがあると事前に伺っていたので、きっかけとしてお話を頂きたい。

(岐部委員) 地域に住む方々はつながりがなかなかない。そこで、地区自治連合会や地区社協、民生委員などでプロジェクトを立ち上げた。毎月会議をやっていて、もう130何回目になっている。なかなか外に出ていけない方々、地域とつながれない方を引っ張り出そうということから、あおぞら昼食会というものを始めた。昼にカレーを作ろうということで、特定の地域にこっちから出前で行こうということで始めた。毎年、地域の中で場所をどんどん変え年に2回、3回と実施していたところ、そこに出てくる方々が「カレーの匂いがしたけど私出ていいのかしら」と、窓からのぞくようになってきた。民生委員さんたちとも連携し、すぐ声をかけに行く。2～3年目に入ったときに、「夜も飲みたいね」ということから、暑い夏には星空ビアガーデンというものをやることになった。お手伝いをしてくれる方々は、若いお母さんたちが出てきてくれるようになった。その方々がそのまま、例えば単位町内会の役員になり、担い手となっていくというのが出てきて、すごくこれはいい効果かなど。たまたま最初は単なるご飯を出そうとやったものが、担い手の獲得につながってきたというのがある。

それからもう一点は、小学校の校外委員になる人が少なくなってきた。少子化の中でPTA解散の話までが時々出てきた中で子どもたちを支えていくには、やはり子ども会というのは必要だよと。その子ども会は学校の校外委員に成り代わるものやろうということで、募集をかけた。そうしたところ希望者が多くて、校外委員の役員で、当時、大体6～7人しかいなかったのが、そのメンバーが立ち上げて動き始めたために、今、30人ぐらいのメンバーが、登録に応じてくれて、今ではそれで地域のお祭りにも、「私が手伝うよ」と来るようになった。なので、担い手の募集も楽になってきた。ちょっとしたことだが、あおぞら昼食会や星空ビアガーデン、それから、学校の校外委員が減ることからの逆効果が出て、いいつながりになってきたかなというのがある。

(西尾委員長) 活動者、担い手にもつながっていくというところが、今日のテーマにぴったりの皮切りのお話を頂いたかなと思う。ぜひこのテーマで意見交換をさせていただきたい。

(坂本委員) 先ほどのソーシャルキャピタルのリーフレットの件で、2つ目の四角の「「つながり」が個人も地域も健康にします！」という明記が、すごくいいなと思っている。個人の身体的な健康も精神的な健康もこの中に指しているし、市民の活動の活性化から地域が健全に循環していくんだなと感じ、いい文章だなと思う。

歯科医療の立場からすると、患者を診るときに、全てのライフステージごとに健診事業等で関わっていく。クリニックに入ってきたときの服装や、体つき、話す内容などがその人の生活の背景をすごく映しているのだから、そこの部分を見逃さないようにしている。地域の担い手とは少し話が変わる、歯科医師会の中でも同じようなことが起きている。担い手がない、つながらない。ちょうど今、歯科医師会の中でもそういう議論があり、この地域とつながるなと感じたが、なるべくいろいろなものに参加していただくように、そして、そこで次に何かを手伝ってねと言ってしまうとまた引っ込んでしまうので、言葉で感謝をたくさん伝えようかと思っている。例えば、助かったとか、すごい

ね、こんなことまでできるんだねとか、本当に基本的なことだけれども、普通の団体や会社でもやはりつながると思う。なので、言葉の力を大事にして伝え続けていく。そのうちに、そこに信頼関係が生まれて、少しずつ少しずつ出てきてくれるんじゃないか。少しずつ担い手が増えてくるように、時間はかかるけれどもやっていきたいと思う。

(西尾委員長) やはり言葉がけと言葉の力はすごく大きいんだなということを感じた。

(森委員) 自分の住まいの近くで消防団に関わっていて、地域活動には参加していると考えるが、地域という言葉がどれぐらいの範囲を指すのかなというところが皆さんそれぞれ違うと思う。私個人的には、地域活動、その地域という範囲を自分が動く土地と捉えている。その中で、この担い手づくりという部分では、今回、1つ前の資料のちふくちゃんの活用や、わかりやすい版というツールを使ってということで、昨年度も意見させてもらった部分ではいろいろと動いていただいているなというところではある。

しかし、担い手という部分で、ちふくちゃん、また、わかりやすい版よりももっと細分化した、それぞれのターゲット別に啓発をするというのではないかと思う。例えば東京だと、地域活動や福祉の啓発のために、子どもだと誰でも知っているかいけつゾロリを使ったバリアフリーのユーチューブ動画をつくっている。ほかの自治体だと、消防団の団員募集にインスタ等を活用したり応募窓口というのをもっともっと緩いところに持っていく。市のホームページ、区のホームページ等で応募窓口を設けたりしているところがあるかと思う。

実際、今、働き手の世代では、地域活動といったものになかなか時間が割けない。また、仕事優先、子ども優先、ダブルケア等の実態もある。子どももある程度育ってきたので、もう少し消防団活動をやらなければいけないかなと思いつつも、どんどん消防団が高齢化とともに減っている中では、60歳になったときに抜かれるのかなという不安もある。実際、ここに対して働きかけをそれぞれの消防団が行うということもあり、行政としても担い手づくりという部分には何をかけるか。時間、お金、手間など様々な部分をかける必要があるかと思う。けれども、そこに対してももう少し掘り下げて、また、ターゲットを絞った啓発の取組等をしていただければと思う。

(名倉委員) 地域活動とか参加という定義をもう少し議論するほうがもっと前に進むのかなというのは、改めて資料を見ると感じる。

その上で、老人クラブでも担い手不足というのは同じように課題になっている。ただ、担い手とか、あるいは中心になってとか、リードしてといった言葉が先行すると、どうしても皆さん構えてしまって、次の行動、活動に移れないというのが現状。参加から担い手に一足飛びに飛ぶのではなくて、1.5歩目みたいな感じで、曖昧な位置づけの方々をどう増やすかという考え方もあるのかなと思う。

今、内閣府がつながりサポーターの養成に力を入れ始めているところ。このつながりサポーターは、できる範囲でという言葉がキーワードになっている。また、特別なことをする人ではないというのも一つのキーワードになっていて、今のところ、会長になる方々というのが地域の核の人材、それから会員になる方が参加と捉えると、その間に立つ1.5歩目の方をどう増やしていくのかということに、市老連としては力を入れている。それが、最終的には2歩目の核となる人材につながっていくのではないかなということで取り組んでいるところ。

(西尾委員長) 福祉教育につながるような分かりやすい、親しみやすい伝達や、また、SNS等の活用、情報をいかに発信していくかということ。また、1.5歩目という捉え方が非常に面白いなと思ったが、そこからどう2歩目につなげていくかという課題で、つながりサポーターのようなものも活用しながら進めておられるということを受けた。

(大野委員) 自分たちが楽しい活動をしていくことがすごく大事だなと思っていて、1人が1人を誘っていく、声かけをしていくという感じで、自分ができる範囲で行っていくという感じで活動している。その一つに見守り活動というのがある。子どもたちが帰ってくる時間にそこに立っているとかではなくて、例えば、犬の散歩をしているとか、お花にお水をあげているとか、買物にいくとか、そのときに「ながら見守り」という感じで行っている。「自分ができる範囲で構わないからそういう活動をしていきましょう」と声かけをした。この間も流しそめんをやった地区があり、子どもたちも参加してくれ、「すごく楽しいからまたやって」というような声も頂いた。子どもだけでも、「いつかは自治会長さんだね、町内会長さんだね」という声まで上がったぐらい、高齢の方もいらしたが、本当に一体となって、楽しいイベントができたなと思っている。自分が楽しい活動をしていくということがまず一つではないかなと感じている。

(山野上委員) 参加から担い手ということで、今、本当に人口が少なくなっていて、福祉の世界だけではなく、社会的に人が足りない。ラーメン屋さんが従業員がいなくて今夜は営業できません。のように。そういう中で、福祉の世界だけではないところとどうつながっていくか。お互いに声をかけ合うことが必要なのかなと思う。例えば、駅のそばに八百屋さんがあって、八百屋さんの前に椅子が置いてある。そこにいろいろな人が一休みして座っていくが、そこで会話が始まったり、手伝うよみみたいな声かけがあったりする事例がある。地域福祉計画は福祉という名前がついているのでどうしても福祉分野でチラシとかも配布されているが、もっともっと一般のそういう八百屋さんであったり、日々行く薬局や歯科医院など、ぜひそういうところい置いてもらうというのが大切なのかなと思った。

それともう一つ、前に地域包括支援センターで総合事業が始まったときに地域の活動がソーシャルのほうになっていくということでとてもいいと思っていたんです。今日は利用者、明日は担い手みたいな話がすごく出ていて期待していたが、今、どちらかという要支援という制度のところまで分けられてしまうというかたちになっている。もっともっと利用者側の人たちの活躍の場をつくっていく。要支援であっても担い手になっていく、そんなところの声かけがうまくできるともっといいのではないかなと思っている。

(小林委員) 鶴見区では2年前に防災訓練にテーマを当てた。地域で拠点訓練を行うが、若い人の担い手を集めて地域に戻ってもらって、また、地域が活性するような企画を始めた。地域に大学も高校もあるので声かけをして、若い人を集めて防災意識を高めながら、防災の訓練をしながら大きなテーマで行ったが、幸いにも来た方が地域に戻ってきて、街の地域福祉に関しても、お祭りに関しても若い人の参加が非常に増えた。こういう手を使いながら若い人の担い手を増やそうというという機運が高まってい

る。

(西尾委員長) 最初のご提案のように、防災の分野も一つきっかけにしてということかなと思う。

(穴澤委員) 担い手と書いてあるが、実ほどの世代を担い手と呼ぶのかというところが一番なのかなと思う。シニアでもすごく元気な方たちもいらっしゃるし、障害の分野においても、小さいときから共に育つことによってお互いに分かり合える部分は増えてくるので、やはり小さいうちからのそういった関わりはすごく大事なのではないかなと思っている。

先日、地元の小学校6年生の子たちに授業の中で話をしてほしいと依頼があり、地域を知る、地域の一員として私たちはどう動いたらいいのかというところで授業を行った。学校・地域コーディネーターのほかに、別に市民団体に活動しているが、この市民団体の中でつながりづくりということで、9月に金沢区にある支援学校で防災関係のイベントを実施した。今まで障害分野の子たちはどうしてもあまり防災に関わりが少なかったと思うが、そういった人たちがやはり地域にも住んでいるよというところの一つ起点になればいいかなと思い開催した。子どもたちにどうやって関わってもらって、教育委員会とかとも連携を組みながら、授業の中などで話をする場があるということで、ソーシャルキャピタルの部分も子どもたちの授業に生かせるのではないかなというのをすごく感じた。

(西尾委員長) 障害のある子ども、障害のある人の参加のきっかけを日常の中でどうつくっていくかという課題も感じた。山野上委員からは、利用者、担い手と分けるのではなく、利用者側の方も活躍する場面をどのようにつくっていくのか、ということも重要ではないかというお話だったと思う。

(福田委員) 瀬谷区では今、移動販売がとても重要になってきている。宮沢地区はどうしても坂を上らないと買物に行かれないという立地であり、アンケートの結果で何とかしてほしいと意見が挙がった。そこで移動販売に取り組んだらどうかということで、大型スーパーが軽トラックを2台出して公園のところに売りに来ていただいている。土木事務所にも話をして、公園で販売をしてもいいという許可を得た。そして、販売だけでなく、ついで見守りもやってみようということになった。さらに、せっかく瀬谷区でGREEN×EXPOを2年後に開催するということがあって、公園にお花もあったほうがいいよねということで今、花壇づくりも始めている。移動販売も一定の売り上げがあり、事業者も非常に喜んでいる。買物をして持って帰る人が坂を上るのが大変だというと、ボランティアの人が持って家まで届けるというふうなことをしながらいろいろとコミュニケーションを図って、そういう中で花壇もあるといいよねなんて始まって最近はお花を植えたり、何かをしながら楽しめる公園という形になっている。

三ツ境地区では、商店街でわんわんパトロールといって、犬の散歩をしながら怪しい人を見かけたら警察へすぐ通報するという形で取り組んでいる。

(西尾委員長) ありがとうございます。移動販売は週1回ぐらいか。

(福田委員) 週1回。

(西尾委員長) 移動販売の場所がちょっとしたサロンになって小売りの場所になるとよく伺う。

(福田委員) 陽気のいいときは健康チェックといって、ケアプラザの協力を得て血圧測定

をやっている。

(西尾委員長) なるほど。そういう機会にもなっている。先ほど八百屋さんの店先の例もあったが、そういう気軽に自然な場があるといいし、それから、わんわんパトロールは先ほども、忙しい中で何々しながら見守りするという方法も一つ参加しやすさを高めているのかなという感じがする。

(久保田委員) 横浜市は介護予防の事業でフレイル予防にかなり力を入れている最中かなと思う。フレイル予防の講座などの機会の中で、「地域の活動に参加していきましょう」という話をしているので、せっかくだからそういう事業の中でもっと地域のサロンにつながり、自分たちが主体的に活動することで、より健康になりますよといった話をセットにするなど、親和性のある違う事業とつながっていくというのは一ついい方法ではないかなと思いついていた。

説明のあった南区の意識調査のところで地域参加の数値が40代が高かったというのは、子どもが地域と関わっている世代の親に40代が多いのかなと。子どもがちょっと大きくなって、50代ぐらいになって子どもが地域と関わらなくなると、自分の仕事の忙しさにかまけて地域から離れていってしまう。それで、40代は高いけど50代は少ないんじゃないかなと想像している。そこで、中学生や高校生に、イベントに主体的に参加してもらおうという機会をつくった。そうすると、中学生、高校生が主体的に関わって、その親御さんも引っ張られて来るんじゃないかなということで活動を始めたが、実際にはそこに親がつながってはきていない。ただ、中高生がそういう活動が必要だと思ってくれれば、何十年か先に戻ってきてくれるかもしれないと思っている。

一方、旭区では小学校がすごく協力的で、地域を自分たちで見学してこんなことをやったらいいんじゃないかと、地域の商店街とつながるなど、授業の中で地域をよくする活動にはどういうことがあるかというのをやっている。小学校がつながっているせいか、小学校の場合は親御さんがついてきやすいのか、その親御さんが一緒に地域の活動に興味を持って地域に出てきているという印象がある、小学校の中でいろいろな活動を、というのを横の展開としてつなげてもらえるともっといいのではないかなと思う。

(内田委員) 2つの意見を出したいと思う。1つ目は、横浜市身体障害者団体連合会として、今までは障害者福祉活動が多かったが、実際には地域の活動はまだまどというところがある。それから、団体としては高齢化している。若い人が少ない。そこで例えば、横浜駅や桜木町など、いろいろなところに出向き、障害者の理解が広まるように頑張っている。

あともう一つ、11月に世界的な大きなイベント、デフリンピックが行われた。オリンピックとパラリンピックの認知度は、当然皆さん知っているぐらい高いが、デフリンピックの認知度はなかなか広まらなかった。それをどうやって上げていくかということで、キャラバンカーを使って全国的に回っていこうという方向で1年間頑張ってきた。それで、少しずつ聞こえないことに対する理解、あとデフスポーツがあるということを発信してきた結果、1万8000人ぐらいのボランティアが参加され、とても大きな協力をいただいた。一生懸命皆さんが動いてくださった結果、テレビ、新聞、雑誌、いろいろなところに多方面で取り上げられた。一般の方たち皆さんが、聞こえない人のスポーツがあることを大体分かってきてくださってよかったなと思っている。

今回のことをきっかけに、一般の地域にも広まっていくんじゃないかなと思う。確かに障害者というとまだまだ力を出していくのは難しいが、その代わりに一般の方たち、地域の方たちのお付き合いのところから広めていけたらいいのかなと、今この会議の中で皆さんの意見を聞きながら考えていた。障害者が参加できる、担い手というところについてはまだまだちょっと難しい、厳しいところがあるが、お互いに支え合う地域をつくっていったらいいなとも思っている。

(井汲委員) 精神障害はもっと世間に出にくい、地域に入っていくにくい。どういう障害だか分からない、どう声をかけていいか分からないといつも言われるが、最近はいろいろなケアプラザから8050の問題などで、私たち家族に話をしてくださいという依頼が来る。前は全然なかったんですけども、そういう意味では、まず少しでも理解していただくということでありがたいなと思っている。

説明資料を見ると、地域での活動者は80代が多かった。でも、実際、会員を見ると、80代が結構多いのかなと、改めてこれとよく似ているなという感じがする。高齢者とか、子育て支援とか、障害者もケアプラザの仕事の対象になっているが、知的障害の方とか身体障害の方が多くて、精神障害の集まりというのは、少しずつ増えているが、なかなか開けていないのが現状だと思う。そういうところに入れていただけたらいいかなと。それで、理解していただけたら、体調のいいときはみんな積極的に担い手と、責任持ってということまでは難しいが、現実にはみんなお祭りの担い手ぐらいはできるので、そういうふうにして仲間に入れていただけたらいいと思う。

それから、私たちはSNSですかね。会員になりたくないということで家族会もどんどん減っているが、ネット上の家族会だと会員が何万人とすごく多い。ただし、全国的にその会を運営する担い手がやはり足りない。担い手にはなりたくないが参加はしたいという方が多い。そういう意味で、いろいろな分野にこういう活動を広げて、直接だけではなく、SNSなども活用できるといいかなと考えている。

(篠崎委員) 私は最近、ある障害者施設の障害を持っている方を見守る、いわゆるあんしんキーパーに登録した。それに関連して、地域にはいわゆる世話好きおばさんや、あるいは世話焼きおじさんという方がたくさんいらっしゃるが、そういう方に地域のリーダーになってもらい障害のある方を見守ることができるということを少しずつ広げていって、それに携わる方を増やそうかなと思っている。それは決して地域のリーダーであるとか、担い手であるとか、そういう構えたものではなくて、緩やかな見守り活動をしながらか仲間を増やしていきたいなと思っている。

(森委員) 久保田委員から話のあった50代の担い手の話だが、身近にいるその年代の方が、皆、介護をしなければいけない状態で働くこともできないという。これは、日本における超高齢化の中で、行政また社協等にも考えてもらわなければいけない課題。これに対しては、神奈川の福祉サービス振興会等も地域共生社会の講座等を開催して、いかに地域で支えていくかということも進めているところではあるが、40代、50代が介護の担い手にもなっているといたところも背景にはあるかと思う。逆に70代、80代になると、これは先ほども話があったとおり、フレイル予防として、できるだけ外との関わりを持つ必要がある。また、単身世帯等になると自分たちで何とかしなければいけないという状況や、自治会等については70代、80代の方々が担わなければいけないという状況になっているところが、数値の上昇の背景にあると聞いている。

地域活動という部分で、後見的支援制度のお話を頂いた。けれども、横浜市においては、平成14年に横浜市後見的支援を要する障害者支援条例というものをつくってあるはずだがこの条文の趣旨が進んでいないところについては市でも検討してほしい。

それと、市民後見人が、他の自治体、具体的には東京都に比べると、あまりに少ないかなと感じている。たしか209人が市民後見人として登録しているかと思う。が、その半分、130人、140人程度が受任につながっているという状況かと思われる。地域を知っている方々が地域で暮らしている方を見守るという部分においては、もっともつとこの市民後見人を増やしていく取組について、自主的また協力的に動いていただけるといいかと思う。

それと、1.5歩目をつくってはというところに私なりの考えとして、今、相模原市ではシビックプライド向上という計画を打ち出している。横浜市においては、この計画の中では、高齢者、障害者、児童、生活困窮、それ以外にもかなり増えている外国人、様々な方の多様性というものの理解を深めるとともに、また、他自治体からこのみなどみらいや西区に集まってくる方々にもシビックプライドというものを持っていただいて、横浜をどういうふうによくしていこうかという担い手になることも一つ視点として考えていただければと思う。そのために、各区においては国際交流ラウンジをうまく活用したり、外国人の方を招いた食事会を開いたり、様々なイベントに取り組んでいる。横浜市として、370万の一つの塊として、どういったものを進めていくかというのを考えていただくといいかと思う。

(水野委員) 横浜市医師会の常任理事の水野です。どんな業種も担い手、若い世代とか、そういうのはなかなか難しいかなと思うが、一方で、例えば市とか区の医師会で区民まつりなんかに参加すると、若い世代の方が結構来ているなど感じる。そういうところに、例えば認知症を知るとか、そういった私たちが主催するようなイベントを掲示しておく、意外と興味があるという、これ参加しようというような方が、自分事に考えてくれる人がいることを考えると、なかなか全部のものを担い手にするのは難しいと思うが、興味があるものでいかにタッチポイントを増やすかということを経道に進めていくことが考えられると思う。いきなり急に増えることはない、一つ一つそういうことをしていくと、恐らくだんだん増えていくのではないかなと思う。

同じように防災訓練の際も、救護隊訓練として行くと、興味を持ってくれる人がいて、それぞれ防災や認知症に興味があると声掛けがある。また訪問診療をしていると、障害者のお母さんたちから障害がある方がどういうふうに住んでいるのかと聞くことがある。生活の中でそういう方々にどうやって触れていくかということを増やしていくような、何かいろいろな興味湧くような、また、知ってもらえるようなことをやっているうちに担い手が増えていくのかなと思う。この地域のつながりはすごく大事だと感じていて、この前の大分の火事の際に自助・共助がすごく生かされたと聞いている。地域の中で防災意識やつながりがあったら、民生委員さんも大きく活躍したと聞いているが、そういったことを行うには、自分たちは地域の中で生きているんだということを全世代に、高齢者から若い人からという全世代参加型で進めていくと良いと感じた。

(星委員) 横浜市の場合は社協が中心になって市民後見人の養成をしていて、ぱあとなあ神奈川でも講師等を派遣している。市民後見人というのは同じ市民の立場で、認知症

や様々な障害で判断能力の低下や、金銭管理や契約等がなかなかうまくできない人たちを支えていきたいと思いますという制度。ただ、権利侵害の問題もあるので、きっちりいろいろなカリキュラムをこなしていただいて、知識を持った上で市民後見人としての活動をしてもらっている。そういう意欲のある方が今、たくさん横浜市の中では応募いただいて、市民後見人の活動をしていただいているという状況。ただ、現状はどうしても専門職後見人と同じようなレベルの後見をする状況になるので、社協でも慎重になってマッチングをしていると思う。市民後見人の養成の数よりも実際に受任している数が少ないのが正直なところなので、今後、市民後見人となった方の意欲をそがないように、できるだけ活動していただく方向でお願いしたいと思っている。

あともう一点。認知症サポーターも地域の活動であるのではないかと考えている。私が以前働いていた場所では市民後見人の養成を盛んにやっていて、町内会レベルで認知症サポーターの勉強をして認知症の方を地域の中で見守るという活動をされている地域もあった。小中学校の児童生徒を対象に認知症サポーター養成講座をやって、地域の中でお子さんたちが認知症の方に対して驚かないようにとか、お子さんの立場で見守っていただくことをお願いして実際に活動しているところもあり、子どもが講座を受けることによってその親御さんも認知症についての理解を深めたりという相乗効果もあるので、認知症の方を地域の中で見守る草の根の理解というのを担っているのかなと考えている。先ほど精神障害等の障害者の話もあったが、やはり草の根で障害の理解を深めてもらうことが地域の中で次の一步を踏み出す、活動の中で踏み出す一番大切なところなのではないかと思う。何も分からないで一步を踏み出すことはできないので、そういう地道な活動をぜひ地域の中で進めていく必要があるのではないかと考えている。

(穴澤委員) 9月の金沢支援学校で行ったイベントで、金沢区社会福祉協議会の自立支援協議会の方にお越しいただき、車椅子や高齢者体験を実施したところ、「乗ってみたかったの」とか、「目が見えない人の体験してみたかったの」と体験しに来る小学生や中学生が多くいた。AEDや心肺蘇生にもすごく興味を持っていたので、やはりそういう場所がどんどん必要だなと強く感じた。

(大野委員) ガイドキーパーや、オレンジ事業の認知症サポーターをしている。私たちは認知症のサポーターというのを、地道に活動していくことが大事だなと考えている。

また、地元では障害者も健常者も一緒になってボッチャ大会を年に2回開催しており、それには福祉施設の方たちも本当に喜んで、今度はいつやるの?とってくれる。みんな一緒だよといった感じで、うちの地域ではそういう活動に取り組んでおりますのでご報告いたします。

(鶴見委員) 私の所属している会でも、やはり若い人たちの役員や運営委員の担い手がなかなかおらず高齢化の一途という感じになっている。今の若い人たちに心に引っかかってもらえるような情報を流すというのはもうSNSを除いては考えられない。若い人はちょっとしたインパクトのあるものを好むというか、そこに引っかかればそこから先は自分で幾らでも調べることができるので、これって何?と気になってもらわない限り、ほとんど何の情報も伝わらないという時代になっていると感じている。やはり印刷物だけでなく、ウェブでの広報もする必要があると思うし、広報印刷物を置く場所も、福祉の関係の人が見るところに置いてあまり意味がないんじゃないかと。

だから、例えばもうちょっと外の世界、福祉って何？というような人たちも見るようなところで配っていただけたらいいなと思っている。

それと結局、人を育てていくには時間がかかると思う。私は最初、30代、40代のお母さんたちに引き継ぎたいと思っていたが、今のお母さんたちは、30代、40代、50代となるほど、自分の時間ができればできるほど、仕事もするし、趣味も持つし、自分の人生を生きていこうとする。子どものための患者会に時間を取られることにはなかなか思考が行かないので、当会では15歳以上の病児本人たちで活動するサークルのようなものを作っており、その子たちにいろいろな活動を丸々投げて、お金は出すけど口出しはしない、サポートはするけど指示はしないというのを約束事としていろいろやってもらって10～20年ぐらいやってきた。最近、その人たちがかなり成長してくれて、もしかしたらもうその本人たちに任せても大丈夫かもしれないという感じがしてきている。すごく具体的な決まり事だけを頼むのではなく、もうちょっとこんなことだってできるのにとか、もうちょっと考えたりするところから関わりたいと思ってくれる人も出てくるので。一緒にやってくれるとこんな楽しいことがあるんだけどねということを進めていきたい。

(西尾委員長)

まとめると、やはり担い手というのは、人材、働き手も非常に不足している中で、地域活動の担い手をどうするかという、そういう視点でも考えていかなければいけない。もう一つ、このテーマが出てきた背景には、やはり社会の孤立、孤独がかなり進んでいて、暮らし方やつながりが希薄になってきているということが背景にある。ではどうしたらいいかという中で、健康をきっかけにしたり、あるいはフレイル予防をきっかけにしたり、それから認知症や障害の理解ということをきっかけにして、つまり認め合うことが孤立を少し打破していくような取組にもなる。この計画でいうと、認め合いという場面をどうつくっていくかということも提起いただいたし、認知症やフレイル予防というのは一人一人が関心としてあるので、その生活上の関心をきっかけにできるような場をつくっていく。

そして、やはり身近な場が必要だということだと思う。訪問販売の場であったり、八百屋さんの店先であったり、そういう場の中で、いかに楽しく入りやすく関係づくりをしていくのかということが重要ななと思った。

私は30年ほど前にボランティアセンターで仕事をしていたことがあるが、そのときボランティアがなかなかできない理由として、時間が忙しい、それから情報がない、どこに行ってもいいか分からない、何をしてもいいか分からない、それからもう一つは心理的抵抗感がある、敷居が高いというところがあり、それらをどう潰していくかということを経営的に考えなければいけないのかなと思う。1.5歩から2歩にするにはやはり時間がかかるというお話があった。けれども、そこをどうしていくかというのは、今日のご議論の中ではあまり出てこなかったけれども、そこを助ける、促進させるファシリテート役とかコーディネーター役とか、そういう人の存在というのも非常に大きいのではないかと感じた。

その他 生活支援課長より生活困窮者自立支援制度について説明。

	<p style="text-align: center;">福祉保健課より身寄りのない高齢者等の支援について説明。</p> <p>閉会 (岩井事務局長) (閉会あいさつ)</p>
<p>資 料</p>	<p>○令和7年度 横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 次第</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会委員名簿 (資料1)</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会運営要綱 (資料2)</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画について (資料3)</p> <p>○意見交換 (資料4)</p> <p>○第5期横浜市地域福祉保健計画推進スケジュール (資料5)</p> <p>○中間評価について (資料6)</p> <p>○横浜市の生活困窮者自立支援制度について (資料7)</p> <p>○身寄りのない高齢者等の支援について (資料8)</p>